TABATA MINORI

テクノロジーと法の未来へ

Vol.24

FACULTY OF GLOBAL INFORMATICS

国際社会が抱える問題を「情報の仕組み」と「情報の法学」の視点で分析・解明し、解決策を論理的に構築する、iTL独自の学びに迫ります。

戦争や特攻の記憶を語りつなぐ、ジャーナリストへの一歩目

国際情報学部国際情報学科3年／神奈川県立麻溝台高等学校出身
田畑（たばた） 美徳（みのり）

はじめに

これからの日本において、戦争や平和は誰が語りつないでいくべきでしょうか。それは、私たちのような若い世代だと考えます。中央大学でこのように実感させてくれる研究に出会い、現在ドキュメンタリー制作に取り組んでいます。

ゼミでの研究

私はジャーナリズムについて研究する松野良一ゼミに所属しています。小学生の頃から、現代に残されている歴史的建造物や文化を目にすることが好きでした。大学2年生になりゼミの選択に悩んでいる際、松野教授の「ジャーナリズム論」を受講し、中央大学の先輩方がこれまで制作した戦争や特攻のドキュメンタリー映像を視聴しました。その時、歴史を学びたいという自分の意欲を活用できる分野はジャーナリズムなのではないかという考えに至りました。次第に戦争や特攻を題材とするドキュメンタリー制作への興味が湧き、松野ゼミでジャーナリズムを学ぶことを決心しました。

私は「iTL先端的プロジェクト奨学金」学部長賞を受賞し、現在は不時着した特攻隊員を研究テーマにしたドキュメンタリーを制作しています。鹿児島県には黒島という小さな島が存在します。黒島には太平洋戦争当時、10人の特攻隊員の遺体が流れ着き、6人の特攻隊員が不時着しました。調査を進めるうちに、黒島と関係する中央大学OBの安永克己さんという方の存在を知りました。当時、黒島は本土との連絡船も途絶え、孤立無援の状態。黒島に不時着した安部正也少尉という特攻隊員が、特攻基地のある鹿児島本土に戻り再出撃することを望んだため、安永さんは島に唯一残されていた手漕ぎの船で、安部少尉を鹿児島本土まで送り届けたといいます。

私は、黒島特攻平和祈念祭という慰霊祭に参加するため、実際に黒島を訪れました。鹿児島港からフェリーに乗船し約5時間。黒島には、安永さんが建立した安部少尉の慰霊碑、不時着した特攻隊員がつくった黒島平和公園や平和観音像があります。そして、黒島の人々、不時着した特攻隊員を知る人々が一堂に会する中、慰霊祭が開かれました。20歳前後という、私たちと近い年齢で亡くなった特攻隊員。激動の時代に巻き込まれた特攻隊員に対して哀悼の意を捧げました。

また、この慰霊祭で、鹿児島本土から訪れた高校の演劇部員たちに出会いました。彼らは、黒島に不時着した特攻隊員と島の人々の交流を演劇で語り継いでいるとのこと。今を生きる高校生たちが、どのような思いで特攻の演劇に取り組んだのか興味が湧き、取材をさせてもらうことにしました。演劇の活動を通して「特攻隊員は神様のような存在だと思っていたが、れっきとした人間だったと気付き、それを演劇で表現した」という高校生たち。さらに、特攻の演劇活動以前と比較

1 特攻隊員が不時着した、鹿児島県三島村黒島　2 中大 OB 安永さんが黒島に建立した、特攻隊員の慰霊碑
3 2023 年度黒島特攻平和祈念祭に参加する筆者　4 高校生たちによる、黒島を舞台とした特攻隊員の演劇　5 演劇を行った高校生に対して、インタビューする筆者

して、「戦争や紛争などに関心を持つようになった」「戦争を語る人の話の重みを理解できるようになった」と語り、「演劇を見て抱いた興味が、さらに伝播して広がっていくことが大事だと思う」と話してくれました。

埋もれた歴史や事実を語りつなぐ

この研究を通して、世の中にはあまり知られていない歴史や事実がちりばめられていることを実感しました。研究前は黒島の存在はもちろん、そこに特攻隊員が不時着した事実も知らず、特攻に関する知識も持ちあわせていませんでした。しかし、慰霊祭への参加のため黒島を訪れたことで、不時着した特攻隊員と島の人々の絆が戦時中から現在まで大切に受け継がれているのを目にしました。また、黒島という小さな島に、中央大学OBの安永さんが残した慰霊碑、黒島平和公園や平和観音像など、特攻の歴史が形として残されていることに衝撃を受けました。その場所に行って初めてわかる事実や、歴史のつながりがあることを学びました。

戦争を知らない世代が記憶のバトンを受け取り、次の世代へと渡していく――。高校生たちに触発された私は、自分も特攻の歴史を記録し、後世に語りつなぐ一人になりたいと思い、黒島での出来事と高校演劇をテーマにしたドキュメンタリー制作に挑んでいます。

これから始まる

今後は、戦争や特攻の記憶を語りつなぐことに焦点を当て、研究をさらに発展させたいと考えています。また、この研究がきっかけでジャーナリズムの世界に、本格的に興味を持ちました。埋もれた事実や人々の声を掘り起こし、世の中に問題提起できるようなジャーナリストをめざします。